

エージェンシーと呼ぶだけで新しい視角を提示したと勘違いしているかのような傾向すらあるが、本書はそうした流行とは一線を画し、「エージェンシー」という語はほとんど用いられない。他者との共同性を生み出し、それを変化させる力をエージェンシーと呼ぶならば、「精霊の力」はエージェンシーにほかならないが、あくまでも精霊を實在論的に論じる立場からか、實在論的な語彙のみを用いて精霊の人間社会との関りを描き出す、そのアプローチから学ぶところは大きい。

人と世界に働きかける「精霊の力」に着目した議論は、北タイのコン・ムアン社会のみならず、より広い文脈で実践宗教研究の地平を切り開くものといえるが、それでも本書によってタイの精霊のすべてが語り尽くされたわけではない。たとえば、なぜこれほどまでタイで精霊が日常性のなかに立ち現れるのかという問いが頭によぎる。本書をたどれば、精霊は〈魂－身体関係〉たる人格を揺るがす存在であり、かつ運命や業よりも予知不能性が高いのが一因として挙げられるだろうが、精霊とは切り離しがたい「恐怖」などの感情にも注目する必要がある。本書の事例の多くは、儀礼のなかに立ち現れる精霊だが、タイの日常にはもっと多くの些細な精霊に関するエピソードがあふれているはずで、そうした経験には常に特別な感情が付きまとう。6章以降で憑依儀礼における「情動的コンタクト」に言及されるが、非儀礼的な場での精霊との邂逅にともなう「情動的コンタクト」については、さらなる事例の積み上げと精緻な分析が求められるであろう。精霊との予期せぬ出

会いは恐れや滑稽さ、ときには感動をもたらすが、これらは日常世界の生々しさに直接関るものであり、精霊研究は、人が生きる実感を獲得するその経路に到達しうるのである。

奥野克巳編著、『人と動物、駆け引きの民族誌』はる書房、2011年、280p.

大石高典*

人間と動物の関係は、人類学にとって古くから新しいテーマである。特定の動物と人間集団との関りは象徴人類学の分野に研究蓄積がある。一方、生態人類学は狩猟採集社会をはじめ、「自然社会」と呼べるような伝統的な環境利用を行なう社会における食物資源としての動物と人間関係を精細に記述してきた。現代社会においては、狂牛病や鳥インフルエンザの問題に代表されるように、世界各地で同時多発的に人と動物の関係が新たな展開を迎えている。わが国では、人と動物の関係を学際・学融合的に研究すべく、生物学、人類学、考古学など専門分野の垣根を越えた試みが相次いで生まれ、最近15年の間に「動物観研究会」や「人間と動物の関係学会」、「生き物文化誌学会」といった新しい学会や研究グループもできている。海外に目を向ければ、欧米の文化人類学では、西欧において二分法的にとらえられてきた自然と社会の接統をめぐる、人間と動物の関係に関する議論が白熱している。そういった状況のなか、本書は現代における人と動物の関係につ

* 京都大学アフリカ地域研究資料センター

いて、世界各地からの分厚い民族誌的記述の比較をもとに、文化人類学的な視点から問い直すことを試みている。まず、目次から本書の内容をみてみよう。

序（奥野克巳）

第1部 人と野生動物

第1章：密林の交渉譜ーボルネオ島プナンの人、動物、カミの駆け引き（奥野克巳）、第2章：狩猟と「男らしさ」と「森の小人」ーパプアニューギニア、アンガティヤでの人間ー動物関係の一断面（吉田匡興）

第2部 人と儀礼動物

第3章：いたぶる供犠ーラオスの農耕民カントゥとスイギュウの駆け引き（西本太）、第4章：幸運を呼び寄せるーセテルにみる人畜関係の論理（シンジルト）

第3部 人と飼育動物

第5章：牛を喰い、牛と遊び、妖怪牛にとり憑かれるーコモロにおける牛と人間の「駆け引き」について（花渕馨也）、第6章：ウシの名を呼ぶー南部エチオピアの牧畜社会ボラナにおける人と家畜の駆け引き（田川玄）

第4部 人と実験動物

第7章：エピクロスの末裔たちー実験動物と研究者の「駆け引き」について（池田光穂）

自然と社会の二元論を批判する欧米の先行研究では、人と動物の非連続性を強調する人間中心主義的な見方を相対化して、人間以外

の「主体」としての自然や動物の「観点」を取り込んだ議論が積極的に展開されている（たとえば、Descola and Palsson [1996] など）。しかしながら、デスコラらに影響を受けた先行研究の多くでは、分析は人間が動物をどう表象するか、という点にとどまりがちで、動物の「行為主体性」や「エージェンシー」を通じてそれらの存在論が考察される場合でも、動物を排除した人間（＝研究対象社会）の側の認識論のみが問題とされることが多い。

そういった研究と一線を画すべく編まれた本書の最大の特徴は、題名にもなっている「駆け引き」というキーワードを設定することによって、人類学者が直接・間接に接近可能な「人と動物が実際に相互交渉を行うようなミクロな時間と場所において繰り広げられる活動をめぐって観察・記述」（p. 12）しようとした点であろう。こう書くと、生業経済としての狩猟、漁労、牧畜といった動物に関する人間活動を網羅のかつ精細に記載しようとした特に初期の生態人類学の研究内容を想起されるかもしれない。しかし、本書ではあくまで文化人類学的な視点が強調されており、それを深めるための仕掛けとして、「駆け引き」という概念がセットされているのである。

「人と動物の駆け引き」という概念は、人と対等な主体性を措定するもので、この点については執筆者の間でも意見がまとまっていない（たとえば、p. 171, pp. 240-241）。しかし、この概念を導入することによって、大変ユニークな本書の構成が可能になってい

る。第 1 部から第 3 部までは狩猟活動や牧畜・家畜飼養といった生業を中心とした伝統的な民族社会における人と動物の関係が取り上げられるのに対し、第 7 章の一章のみで構成される最後の第 4 部では、日本の国立大学の神経生理学研究室における人と実験動物の関りが取り上げられ、両者が同じ土俵で議論の俎上に乗せられることになる。

全体のイントロである序章では、現代社会で人と動物の間に起こっている問題として多量商業屠殺やペット殺といった事例が取り上げられ、それらの問題に通底する「人間中心主義」をどのように乗り越えられるか、という問題提起がなされる。「人と野生動物」と題した第 1 部では、ボルネオ島の狩猟採集民プナンとニューギニア高地の焼畑農耕民アンガティーヤと野生動物の間の主に狩猟活動を介した関係に焦点が当てられる。ハンターと狩猟動物の間では現実的な相互作用のほかに、プナンではカミ、アンガティーヤでは「森の小人」が人と狩猟動物との関係に影響を与える。「人と儀礼動物」と題した第 2 部では、ラオスの農耕民カントウによる動物をいたぶり殺す儀礼と、特定の家畜個体をあえて殺さずに生かしておくという内モンゴルのセテル儀礼が取り上げられる。「人と飼育動物」と題した第 3 部では、コモロ諸島の人々の日常的なウシとの関りから、妖怪牛セラヤニョンベに向かう人々の想像力が、またエチオピア南西部の牧畜民ボラナにおけるウシの名づけを通じた人と家畜の関係が考察される。「人と実験動物」と題した第 4 部では、動物実験の現場で生まれる実験動物と研

究者の身体ハイブリッド状況が記述され、そこで成り立っている贈与関係―人が動物をケアし、動物は実験データという形で人に知恵を授ける―が考察される。医学や生命科学を通じて「人間の福利」に必須の現代社会における「〈不在の必需品＝動物〉(p. 241)」となっている実験動物の民族誌は、序章で提示された「人間中心主義」的な動物への処分の諸事例と呼応しつつ、同時に鋭い対照をなす。これによって、第 1～6 章の民族誌は現代における「人と動物」を考える参照枠として、新たな同時代性を引き出されている。

上述したような本書の画期的な構成にも拘らず、各章において展開される豊かな民族誌データが、それぞれ個別の民族誌的な「事実」の提示と解釈にとどまってしまうだけで、全体をクロスさせた議論がどこにもみられないのはもったいないように思われる。奥野は、人間は動物の間に現実が起こっている「駆け引き」からはみ出た「ふくらみ (p. 14)」の部分に注目すべきだと主張しているが、第 1～3 部の多くの民族誌では、人間の側の事情や「語り」にのみ依存しているため、現象としての「駆け引き」の実態に関する記載が十分に徹底され、深められているとはいえない。そのため「駆け引き」を検討課題としつつも、その検討が十分でないままに、人間による動物表象の問題へと急いで戻ろうとしてしまっているかのような印象を受けた。

それにも拘らず、本書は、どのようにしたら、人間の「都合」だけでなく、動物の「視点」や「事情」までも射程に入れて人間と動物の関係を研究できるのか、という課題にい

くつかの可能性を提示しているように思われる。そのひとつが、人類学者と動物学者が調査地をともにしてコラボレーションするという可能性である。本書は、既に動物研究者からの応答を引き出すのに成功している。哺乳類学者の大舘大學氏が示唆するように、人類学者が動物学者と対象動物の関係について調査するといった新しい試みが実現すれば、人間と動物の関係について新たな側面がみえてくるに違いない [大舘 2012]。

本書のいまひとつの特徴として、日本を含むアジア、オセアニア、アフリカのさまざまな地域、生業様式の人々の動物との関りを横断的に取り扱っている点が挙げられる。現代において、相互に関連するテーマであっても、既存の地域研究では地域ごと、あるいは環境／生業決定論的に措定された集団（狩猟採集民、農耕民、牧畜民、都市民…）ごとに細分された議論に閉じてしまいがちである。そういった蛸壺化した学問分野の現状に飽き足らない読者は、本書の随所に示されている、人はいかに動物とつきあっているのかを動物の殺し方や食べ方といった極めて具体的なことから比較のなかから明らかにしようという地道な問題発見型のアプローチに、きっと素朴な新鮮さを覚えるに違いない。

なお、本書は、平成 20～23 年度にかけて

編者である奥野克巳氏を代表として行なわれた科研費プロジェクト「人間と動物の関係をめぐる比較民族誌的研究」（海外学術・基盤 B）によって得られた研究成果を基礎としており、編者らによる三部作 [本書；奥野ほか 2012；奥野ほか編 2012] の第一弾をなす論文集として位置づけられる。現在、後続のプロジェクト「動物殺しの比較民族誌的研究」（平成 24～28 年度）が霊長類学や生態人類学などの関連分野を巻き込みつつ進行中である。他の作品も本書と共通する問題意識のもとに編まれており、相互に関連をもっている。著者らの関心の由来と発展をたどることができるので、ぜひ一読をお勧めしたい。

引用文献

- 大舘大學. 2012. 「書評『人と動物、駆け引きの民族誌』」『哺乳類科学』52(1): 146-147.
- Descola, P. and Palsson eds. 1996. *Nature and Society: Anthropological Perspectives*. London: Routledge.
- 奥野克巳・山口未花子・シンジルト・近藤社秋・池田光穂. 2012. 「《特集》自然と社会の民族誌—動物と人間の連続性」『文化人類学』76(4): 391-485.
- 奥野克巳・山口未花子・近藤社秋編著. 2012. 『人と動物の人類学』東京：春風社.
- 奥野克巳. 2013. 「動物殺しの比較民族誌的研究」（日本学術振興会科学研究費基盤 A（海外学術））
〈<http://www2.obirin.ac.jp/okuno/killing-animals.html>〉（2013 年 8 月 16 日）